

広島の復興と映画「平和記念都市ひろしま」

広島平和記念都市建設法制定 70 周年「映像で振り返る広島の復興」配布資料

1 広島の復興

1945年8月6日、一発の原子爆弾により、広島市内は一瞬にして焦土と化した。熱線と爆風で建物の約90%が半焼・半壊以上の被害を受け、放射能の影響による急性障害が一応おさまった12月末までに約14万人が死亡したといわれている。

そうした状況下、宇品や西条など周辺地域の部隊が来援し、道路や鉄道など都市機能の復旧作業が始まった。市内電車は9日には西天満町一己斐間の片道運転を開始し、10月には広島駅一己斐間が復旧、鉄道も7日には宇品線、翌8日には山陽本線広島一横川間が復旧した。しかし、秋には枕崎台風や豪雨に襲われ、応急復旧の橋や道路に、またしても大きな被害を受けた。水道の送水ポンプも被爆4日目には稼動したものの、いたるところで漏水し、周辺部まで給水できるまでには相当の時間を要した。戦中からの経済統制が続くなか、極度の物資不足で人々が深刻な飢えと欠乏にあえいでいる一方で、広島駅や己斐駅、宇品には、法外な値段で売買するヤミ市がにぎわっていた。復員・引揚げにより人口は急増したが、建築資材の入手はとりわけ困難で、住宅建設計画は進まず、焼け野原にバラックが立ち並んだ。



広島駅前のにぎわい

こうしたなか、県や市による復興構想が練られていった。復興計画は戦争で中断されていた都市計画をベースに、世界平和を象徴する理想的な文化都市を建設するという理念を加えて進められていった。被災区域の東を広島市、西を

広島県が担当して区画整理事業を開始したが、道路の拡幅や新たな公園緑地のための用地を確保するため、各人に配分される土地は約7割に減少となった。なんとか生活を始めた住宅を立退かねばならず、区画整理事業は市民にとって大きな負担でもあった。切実な財政難にあって、市は政府に対し特別な補助や旧軍用地払い下げなどを求める要望・請願を繰り返すものの、思うような成果は得られなかった。そこで考え出されたのが、「産業の再建」でも描かれる「広島平和記念都市建設法」であった。「恒久の平和を誠実に実現しようとする理想の象徴として、広島市を平和記念都市として建設することを目的」とするこの法律により、広島の復興事業を他の戦災都市の復興とは理念を別にすると位置づけ、旧軍用地の無償譲渡などの道が開かれた。その後、「広島平和都市建設計画」に沿って、平和記念施設、平和公園、平和大通りなどが建設されていく。



区画整理のプランを練る職員たち

2 映画製作のいきさつ

戦災復興計画は、街を元の姿へ復興させるだけでなく、城下町として発達した都市を近代的な都市へと変貌させる都市計画でもあったが、莫大な資金を必要とする復興事業は遅々として進まなかった。そこで、復興資金を海外から募り観光客も誘致しようと、官民挙げての映画製作の話が持ち上がった。

1948年7月、広島県、広島市、商工会議所、中国新聞社らが集い、映画『ノー・モア・ヒロシマズ』（仮題）の製作協議が始まる。監督には東京都の復興と未来像を描いた『二十年後の東京』の秋元憲氏が選ばれた。広島市公文書館が所蔵する当初の脚本案には「記録編」と「都市計画編」の2編がある。「記録編」には「外資導入のために」とあり、広島市の破壊と建設を忠実に記録することで、外国人の関心を引こうとする狙いが記されている。一方、製作されなかった「都市計画編」は市民へ復興計画を紹介し、都市建設への関心を高めようという意図がうかがえる。広島県が発行した『新県政 貿易観光特集号』にも、製作の狙いは「広島の建設に干渉する人々の建設意欲を昂揚するとともに、広島復興のための外資導入にも役立つようにと意図して企画された。…郷

土、広島運命を誰よりも心配し、その破壊と建設の姿を見たく思っているであろうところの広島出身の海外在住者に対しては、この映画の効果は最も強烈に発揮されるであろう」と記されている。

3 広島と海外移住

映画製作の関係者たちが関心を引こうとした広島出身の海外在住者とは—

1880年代、明治政府が進める急速な近代化政策の中、人口増加や米価の下落などにより、自分の土地を手放さなければならぬ人や失業者が増えた。広島では、1884年から始まった宇品築港工事によって広島湾の漁場が狭くなったことなども重なり、政府主導の下、多くの人々が主にサトウキビ耕地で働く官約移民としてハワイに渡った。成功の機会を求めて積極的に海外へ出て行くことを奨励する機運も高まっていた。第1回移民船シティ・オブ・トーキョー号が横浜港から出帆した1885年から10年の間に、広島県からハワイに渡った人は移民全体の約38%を占め、全国1位の移民送出県となった。故郷に錦を飾るべく寄せられる彼らからの送金や持ち帰り金は、相当な額にのぼった。サトウキビ畑での契約を終えると、よりよい収入を求めてアメリカ本土へ転住する人が増え、1896年にアメリカ合衆国への定期航路が開設されると、アメリカやカナダへの移民が急増した。

また、ペルー、ブラジルなどの南米諸国へも多くの移民を送り出した。

4 海外からの援助

しかし、移住先では急増する日系人に反発を抱く人も多く、排日感情が高まっていった。日米関係も悪化していく中で、日米開戦を機に、ついに1942年米国とカナダでは日系人に対する強制立退き政策がとられ、内陸部の強制収容所での生活を余儀なくされた。ペルーにおいても、日系人指導者のアメリカの収容所への移送や邦字新聞の発刊停止など、抑圧された日々を過ごさなければならなかった。自宅への帰還が許された後も、それまで蓄えた財産を失い、一から生活を始めなければならなかった。

戦後自らも苦しい状況にもかかわらず、原爆により廃墟と化した故郷の報に接した日系人たちは、故郷の親族に向けて生活用品の小包を送るなど、被災地への身近な援助を開始した。大規模なものではアジア救済公認団体「ララ」の活動があり、1946年から1952年にかけて大量の救援物資を日本中に送ったことがよく知られている。ララは主に日本と韓国の救援を目的としたアメリカの民間団体による活動だが、その救援物資の約2割が北米、南米の日系人により集められ、広島県にも届けられた。また、広島出身者が多く暮らすハワイでは、1948年4月に広島県戦災難民救済会が組織されて募金活動が行われ、生活困窮者への物資配分とともに母子寮や養老院、保育所などの市の社会施設の整備に充てられた。南カリフォルニアでも、1948年2月、県人会長を中心に原爆被害者救援会を創設し、募金活動を開始。似島学園、広島戦災児育成所などに救援物資が届けられた。



「光の園」の少女たち

当時のこうした日系人からの援助が、この映画製作のきっかけの一つとなったと思われる。

5 フィルムの発見と上映に至るまで

『中国新聞』の報道を追えば、1948年8月6日の第2回平和祭から撮影を開始し、翌年4月に岩国航空隊の飛行機からの空撮により広島での撮影を終えたとある。5月には広島平和記念都市建設法国会通過の場面も撮影し、無事完成に近づいたとの報告も残っている。

しかしながら、映画完成については1950年2月にGHQの検閲を終え、東京と広島で試写する予定と小さく報じられるのみで、試写会が行われたという報道は残っていない。占領期の資料には、米國務省がこの映画について情報を集めていたことを示す文書がある。そこには、「当初の脚本は、原爆による破壊の光景と人々の悲惨な暮らしを描こうとするが、改訂中である」とあり、何らかの圧力や制作側の自粛意識が働いたと推測される。関係者の間でも、「GHQの検閲が厳しく、映画は完成しなかった」「公開不許可となった」と言われ、いつしかフィルム自体も所在不明となり、「幻の記録映画」となった。

長らく失われたと思われていたフィルムは、監督を務めた秋元憲氏のもとで保管されていた。2006年、監督



新生学園での撮影風景

のご子息である秋元翼氏により川崎市市民ミュージアムへ寄贈された。タイトルは『ノーモア・ヒロシマズ』ではなく、『平和記念都市ひろしま』と『産業の再建』の2本だが、「企画／広島県土木部、製作／広島建設委員会」と『ノーモア・ヒロシマズ』の脚本案と同様の文字が刻まれ、脚本案と重なるシーンが数多く収められている。

広島市では、秋元翼氏及び川崎市市民ミュージアムのご好意により、被爆70周年を機に、復興期の広島の映像を収めた貴重な資料である『平和記念都市ひろしま』『産業の再建』の複製を作成し、2015年に地元初の上映会を開催した。

また、2018年7月に発行した『被爆70年史 あの日まで そして、あの日から 1945年8月6日』映像編を製作するに当たり、これらの2作品及び断片的に残されていた未公開カットとシナリオを詳細に照らし合わせる作業を行った。フィルムとともに残されていた脚本の書込みやナレーション原稿から、何度かの改訂をへて『ノーモア・ヒロシマズ』から『平和記念都市ひろしま』『産業の再建』として完成したことが読み取れる。『平和記念都市ひろしま』には英語字幕のネガも残されており、1950年にスイスで開催されたMRA（道徳再武装運動）大会に参加した楠瀬知事と浜井市長が、その帰途アメリカへ渡り、日系人の多いカリフォルニアやハワイでこの映画を上映したと記した現地邦字紙の記事も確認できた。「支障の無い部分だけ」をカットして持って行ったとする浜井市長の議会答弁のとおり、カットされた部分も未公開カットの中に残されていた。このたび上映する復元ノーカット版は、『平和記念都市ひろしま』と国内版専用シーンとして分割された『産業の再建』、そして試写版完成間際にカットされた部分を、当初のシナリオ案に沿って編集し直し、完成時の姿に復元したものである。

6 秋元憲監督について

秋元憲氏は1906年東京生まれ。官立東京商科大学（現一橋大学）を経て1931年、松竹蒲田撮影所に入社。成瀬巳喜男監督の『髭の力』（1931年）や野村芳亭監督の『島の娘』（1933年）などで助監督を務めた後、記録映画を志して1936年、東宝映画文化映画部に移る。1937年『軍艦旗に栄光あれ』で演出家としてデビューし、翌年には『南京 戦線後方記録映画』を監督、亀井文夫の『上海』『北京』（共に1937年）とともに三部作として好評を博した。その後、映画製作会社の統合により日本映画社に転籍、海軍報道班員として現地で記録映画製作に携わり、長編記録映画『セレブス』（1944年）などを手がけた。帰国後は、1946年に松崎啓次らとともに内外映画社を設立する。1956年には新理研映画の監督兼企画調査部長に就任し、『横山大観』（1960年）や『若戸大橋』（1962年）などの作品を手掛けている。1999年没。



秋元憲監督
(秋元翼氏提供)

7 復元ノーカット版シーン解説

- (2:42) 被爆直後の広島市街。1945年10月日本映画社が、「原子爆弾災害調査研究特別委員会」に同行して撮影したものと考えられる。これらの写真やフィルムは米軍が持ち帰り、この当時日本人が入手することはできなかったと言われており、入手経路は謎である。
- (3:55) 1949年4月、明仁皇太子（現上皇）が広島を訪問。市役所屋上から市内を展望、水産試験場やABCC、広島戦災児育成所などを見学され、開館式に野球用具や本を贈られた児童文化会館も訪れた。
- (4:12) 護憲運動で犬養毅らとともに活躍し、「憲政の神様」と呼ばれた尾崎行雄（号堂）。戦中も翼賛選挙に批判的な立場を取り、不敬罪として起訴されたことでも知られる。皇太子に続く来訪者として慈仙寺鼻に建てられた礼拝堂に参拝した場面が撮影された。
- (4:56) 駅から荒神橋に向かう電車通り。歩道には店舗に向かい合うように屋台が並び、人の往来も激しく、にぎわっている様子が見て取れる。
- (5:20) 鯉城通りから本通り入り口を東向きに撮影。次に元の山口銀行付近から西向きに方向を変えて撮影。
- (6:16) カットされていた「街頭録音」「キャバレー」「市内の川に浮かぶ貸ボート」「カキ船と小料理屋」のシーン。

戦前には風紀を乱すとされていたダンスが、戦後は大流行し、シナリオでも民主化を象徴するテーマとして選ばれた。

- (7:14) 広島市から周辺や県北の町村への集団疎開などにより、命は助かったものの、原爆で親を亡くした子どもたちは4,000～5,000人ともいわれる。こうした子どもたちは「原爆孤児」とよばれ、街には靴磨きなどで稼ぎながら、自力で生きる子どもたちの姿が見られた。孤児らを施設へ収容保護する政策がとられたが、これが当時「浮浪児狩り」と呼ばれた。映像は己斐駅前。後のシーンで登場する似島学園、光の園、広島戦災児育成所は、戦争の犠牲となった孤児たちのためにつくられた。



キャバレーのダンスシーン

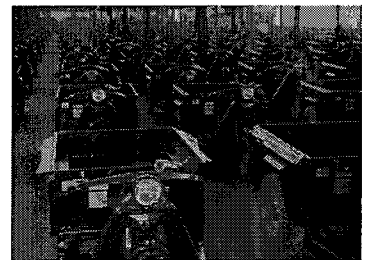
- (7:56) 「産業の再建」三菱重工業広島造船所のシーンでは、2千トンの平時標準船である貨物船「七福丸」の進水式が映されている。



警官に連れられる子どもたち

- (9:00) 「産業の再建」東洋工業（現マツダ）は、1945年12月には戦前からの主軸製品であった三輪トラックの製造を再開する。鉄やタイヤなどの資材が不足し、旧軍需工場の多くが鍋・釜づくりへ向かうなかでの決断であったが、安価で軽便な三輪トラックは復興を支える原動力となった。

- (10:30) 「産業の再建」『ぎんのすず』は児童たちに希望を甦らせ、将来のための文化の素地を育みたいと、小学校教員有志により結成された広島児童文化振興会が1946年に発刊。第二号以降は広島印刷株式会社から発行された。



出荷を待つ三輪トラック

- (11:19) 「産業の再建」広島針産業は第一次世界大戦で欧州からの輸入が途絶えた中国への輸出により飛躍的に発展し、東南アジアやアメリカにまで輸出されるようになった。戦時中は材料の鉄線が配給制となり工場の数も減少したが、終戦を迎えると主要な地場産業として復活した。現在も国内シェア9割を広島県製が占めている。

- (15:36) 「産業の再建」広島平和記念都市建設法は「恒久の平和を誠実に実現しようとする理想の象徴として、広島市を平和記念都市として建設すること」を目的に1949年8月6日制定された。復興計画を進めるために、旧軍用地無償譲渡の道を開いた。映画では5月10日衆議院で可決される瞬間とその様子を見守る浜井市長ら県市の関係者が撮影されている。

- (17:10) 都市計画を模型やイラストで紹介している。必ずしも実現したものではなく、映画の中でも財源がなければ「絵に書いたモチ」と述べているが、新しい広島理想を思い描く当時の雰囲気を感じ取れる。実際の復興作業の中心は区画整理事業で、なんとか生活を始めた市民にさらなる立ち退きを強いるという厳しい現実があった。

- (25:34) 市民広場（旧市民球場付近）で開催された1949年の第3回平和祭。翌年は6月に勃発した朝鮮戦争の影響により占領軍から集会禁止の指令が出され、第4回平和祭は中止となった。平和祭がこの場所で行われたのはこの年限りとなった。

- (27:21) 中島小学校と思われる。原爆で校舎が倒壊・焼失した市内の学校では、急造のバラック校舎がつくられた。特に窓ガラスが不足し、各家庭から障子紙を持ち寄ってしのいだ。校庭の木陰には青空教室もみられた。

主要参考資料：1 西本雅実『「平和記念都市ひろしま」—知られざる記録映画』『広島市公文書館紀要』第28号2015年
2 江口浩『「セレベス」の映画監督・秋元憲氏のこと』スラウェシ島-インドネシア-情報マガジン掲載
3 中川利國「世界へ訴える占領下の広島復興（その1）」『広島市公文書館紀要』第30号2017年
（上記1～3のいずれも、インターネットで公開されています。）

- ・本資料は令和元（2019）年8月10日・25日開催の「映像で振り返る広島の復興」配布資料です。
- ・掲載写真のうち注記のないものは「平和記念都市ひろしま」の一場面です。

令和元（2019）年8月10日発行
名称 広島の復興と映画「平和記念都市ひろしま」
発行 広島市公文書館
広島市中区大手町四丁目1番1号 大手町平和ビル
TEL (082)243-2583
広 D3-2019-232